



<特集：図書館への期待4>

京都大学図書館機構将来構想の策定にあたって

京都大学図書館機構副機構長・第三特別委員会委員長 岡田 知弘

はじめに

京都大学図書館協議会では、昨年度から図書館機構の将来構想の策定作業をすすめていましたが、2009年12月18日開催の同協議会において正式に承認されました。

小文では、本将来構想の策定の経緯と、基本的な内容について、ご紹介するとともに、将来構想実現のためのご理解とご協力をお願いしたいと思います。

策定の経緯

国立大学が法人化して以降、運営費交付金や人員の削減が続くなかで、どの大学でも教員組織のない図書館の位置づけが不安定なものとなり、図書館のミッションなり将来構想を明確にすべきであるという指摘が、図書館界だけではなく学術審議会の答申においても指摘される状況となっていました。

とりわけ、部局図書館・室が50以上もある京都大学の場合、単一の中央図書館や少数の図書館・室しかもたない他大学と比べて、大学全体の図書館運営についての合意形成や意思決定が、大変難しいという特徴をもっていました。京都大

学では、法人化にともない京都大学図書館機構が設立され、その運営は、かつての部局長及び図書主任等からなる図書館商議会に代わり、各部局の委員から

なる図書館協議会においてなされることとなりました。しかし、年度ごとに多くの委員が交代することもあり、電子ジャーナルの負担金問題ひとつとっても、毎年、ゼロベースから議論と調整をすすめるというやり方を繰り返さざるをえず、図書館機構の運営は、場あたりの状況を余儀なくされていました。

そこで、電子ジャーナルの財源負担問題を契機に、個別目標を掲げた中期目標とは別に、図書館全体（附属図書館と各部局図書館・室）の将来構想を策定する作業を、大西有三前機構長の下で、2006年8月から、まずは附属図書館研究開発室のプロジェクトの一環として、全学の



図書館職員から編成されたチームによって開始することになりました。そこでは、統計データに基づく徹底した現状把握と、それに基づく課題を提起してもらい、たたき台をつくる作業を進めました。これをまとめたものが、2008年3月に発行した「京都大学図書館機構の将来構想案」です。組織・人材、図書館サービス、図書館資源の整備、学術雑誌の収集と提供、電子情報資源を中心としたサービス等の分野ごとに、京都大学の図書館の現状と課題が総覧できる、いわば「図書館白書」を作成したわけです。

この将来構想案の策定作業と並行して、すぐに具体化できること、すべきことについては、随時、図書館協議会において提案し、その実現を図ってきました。電子ジャーナルの共通経費化や附属図書館研究開発室の専任教員の採用がその一例です。また、おおよそ10年先を目標とした将来構想とは別に、京都大学図書館機構全体のミッションを定めるために、2007年に「京都大学図書館機構の基本理念と目標」を定め、京都大学の「将来構想」の一環としての図書館機構の役割と目標を、明確に位置づけました。同文書は、役員会及び部局長会議の承認も受けて、全学的にオーソライズされました。

2008年度に、先の将来構想案をたたき台とし、また「基本理念と目標」を導きの糸として、図書館機構としての正式な将来構想を策定するために、図書館協議会で本格的な策定作業を開始しました。まずは、第三特別委員会で策定作業をすすめ、そこで得た成案を図書館協議会に提起する手順で議論を開始しました。途中、機構長の交代をはさみながら、第三特別委員会を中心に議論をすすめ、2009年秋に素案がまとまり、図書館協議会に諮りました。この間、図書館利用者の声を把握するために、大規模なアンケートも実施しました。

図書館機構は、全学の部局が共同して設置している組織であることから、図書館協議会の議論においては、できるだけ各部局の意向を尊重し、合意できる範囲での叙述につとめることと

しました。会議だけではなく文書でのご意見も頂くことにし、多数のご批判やご意見、ご提案を頂きました。第三特別委員会では、その意見の整理と、原案の修正方向について、議論を繰り返して行い、12月18日に全部局の賛同を得られる将来構想案が、承認される運びとなったものです。図書館機構は、各部局が相互に連携するシステムとして、他の機構にはない特性をもって形づくられています。その機構の形成原理に即した、部局連携型の将来構想の策定ができたのではないかと、考えています。

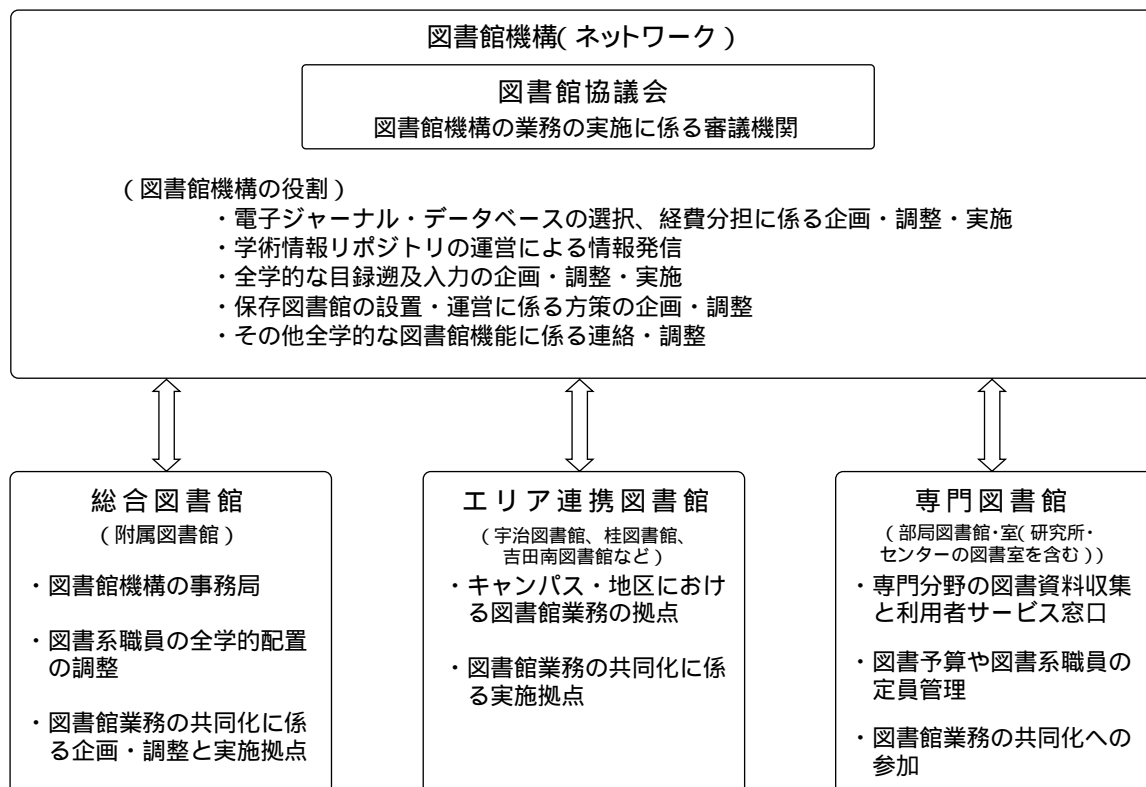
将来構想の構成と内容

策定された将来構想は、「はじめに」「図書館機構の将来像 将来構想の基本目標」「今後10年間の事業目標」の3つの部分から構成されています。

では、将来構想策定の意義と目標について述べています。また、将来構想の計画期間は、おおよそ10年としています。中期目標よりも長く、かつ「基本理念と目標」よりも短期の時期をターゲットとしましたが、今後の国立大学法人や図書館に関わる内外情勢等の環境変化に合わせて、将来構想を随時改定することとしています。

では、将来構想の基本目標を4つにまとめています。第一に全学図書館ネットワークの整備を図ることです。今後、運営費交付金の削減や職員不足、あるいは書庫不足等が予想されることから、従来の図書館・室を、専門性・機能・立地場所によって区分し、別図のような全学図書館ネットワークを、部局自治を大前提に形成していくことを構想しています。附属図書館を総合図書館として位置づけ、全学的な図書館サービスや図書系職員の全学的配置の調整、図書館業務の共同化に係る業務や図書館機構の事務局としての役割を担います。また、従来の部局図書館・室については、専門図書館として位置づけ、各部局の自治に基づいて専門分野ごとの図書サービスを担います。これに加えて、主要

別図



キャンパス・地区ごとに、複数の専門図書館ないし総合図書館が図書館業務を共同化する「エリア連携図書館」を、部局間の協議、合意に基づいて設置することとしています。

第二に、図書系職員の力量の向上を図り、連携体制を強化することです。図書系職員数の減少にとめない、また図書館サービスの技術的進歩の速さに対応するために、不断の力量の向上とともに、部局図書系職員が部局での業務を第一義としながらも、全学的な図書サービスの維持・向上をはかるために図書館機構やエリアごとの業務連携にも参加することが必要になっている、という考えによるものです。

第三に、図書財源を安定的に確保し、系統的なコレクションを構築することです。図書館サービス充実の大前提は、図書館資料や電子ジャーナル、データベースの整備、拡充をはかることです。このために、一層の「共通化経費」、「基盤強化経費」の拡充を図ることを目標として掲げました。

第四に、図書館施設を量的・質的に整備することです。図書館施設面積は、現状では大きく不足しているうえ、保存機能に劣る書庫が多いため、カビ問題や虫害、紙質の劣化問題が毎年のように発生しています。貴重な人類の知的財産を長く後世に残し、活用するために、量的にも質的にも優れた図書館施設の整備が求められているほか、省エネルギー、バリアフリーの施設整備が必要となっているといえます。

以上の基本目標を実現するために、では、今後10年間の事業目標を、学術情報資源の整備：予算確保と蔵書構築、図書館サービスの充実：全学図書館ネットワークの整備、知的成果の発信：学術情報リポジトリの運用、知的資産の保存・管理：電子図書館の運用と保存図書館の整備、利用者の支援：システムの構築とリテラシー教育、人的資源の整備：図書系職員の養成と連携強化、組織力の強化：図書館機構の機能充実と相互協力、対外活動の推進：社会貢献と他機関との交流、の8項目

に分けて、示しています。

これらの項目は、実は、「図書館機構の基本理念と目標」で掲げられた目標の項目に対応しており、おおよそ10年間でなしとげるべき具体的事項を、整理して、叙述しています。

おわりに

今回策定された、将来構想は、A4版で8ページの簡潔なものとなりました。現状分析については、先の「将来構想案」で詳しく記述していますし、文書の性格からしても省略すべきだと考えました。本将来構想では、事業の

基本目標と具体的実施項目のみを簡潔に表現し、図書館関係者だけでなく、京都大学のできるだけ多くの構成員に、それを共有して頂きたいというねらいからです。

最後に、将来構想の策定にご協力して頂いた多くの教職員の方々に、誌面を借りて改めてお礼を申し上げたいと思います。同時に、当然ではありますが、将来構想の策定は、それ自体目標ではなく、むしろその具体化こそ重要であるといえます。よりよい図書館づくりのために、全学の構成員の皆さんの、一層のご理解、ご協力をお願いするものです。

(おかだ ともひろ)

京都大学図書館機構将来構想は以下のURLからご覧いただけます
<http://hdl.handle.net/2433/98131>

附属図書館「学習室24」開室から1年経ちました

附属図書館の「学習室24」が平成21年1月19日にオープンして1年になります。何よりも利用者が安全・安心して利用できる環境を提供しようということでオープンしただけに、無事に運営されてきたことを何よりも喜んでおります。24時間対応の学習室ということもあり、オープン前には、夜間運用での防犯・警備体制を特に心配され、「本当に大丈夫か？」という声も耳にしました。平日における夜間(22:00～翌日9:00)の運営は、昨年1年間で164日でしたが、迷惑行為等のトラブルもなく概ね良好な利用状況でした。

オープンから平成21年12月24日までの1年間(開室日325日)で、当初の予想を超える17万人に迫る利用がありました。「学習室24」は学内者専用の施設のため、利用者の99%が学部学生、大学院生で占められており、身分別・

所属別利用比較はそれぞれ図1、2の通りです。1年間を通した学生の利用状況は、授業・試験期間に該当する1月と7月をピークに、休業期間に該当する2～3、8～9月にはその3分の1以下に減少し、アカデミックカレンダーに沿ったメリハリのはっきりした利用状況(図3、4)と言えます。

特に試験期間に限った「学習室24」の利用状況を見ますと、平日は連日1,500人を超え、午前10時の開室から程なく満席状態となり、夜中の午前2時頃までその状況が続きます。土日祝日においても平日と同様な状況となっております。

今後の「学習室24」の利用時間については基本的には従来どおりですが、「学習室24」、附属図書館とも試験期間が始まる1週間程前から土日祝日の開館(室)時間を試行的に5時間

延長する方向で検討しております。具体的には、
授業・試験期間1週間程前から試験期間終了日
まで「学習室24」の利用時間は、

月曜日 10:00 ~ 金曜日 22:00
(清掃のため9:00 ~ 10:00は閉室)
土日祝日 10:00 ~ 22:00
(附属図書館の開館時間も5時間延長)

となります。

「学習室24」の運営につきましては常に安全・
安心して利用できる快適な学習環境の提供に努
めてまいります。利用者の皆さんにおいても
気持ちよく利用できるような清潔で静粛な環境の
保全にご協力をお願いいたします。

(附属図書館情報サービス課)

図1:「学習室24」の所属別利用者の比較

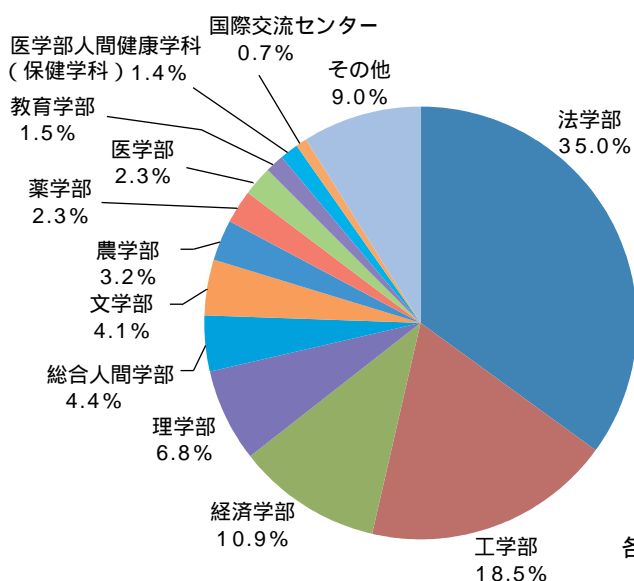


図2:「学習室24」の身分別利用者の比較

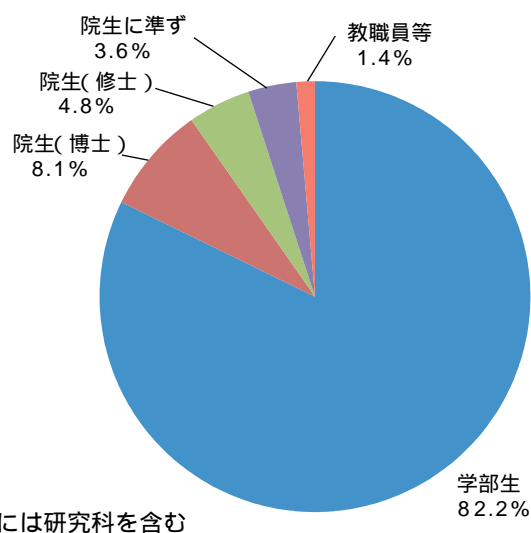


図3:「学習室24」における曜日別平均利用者数

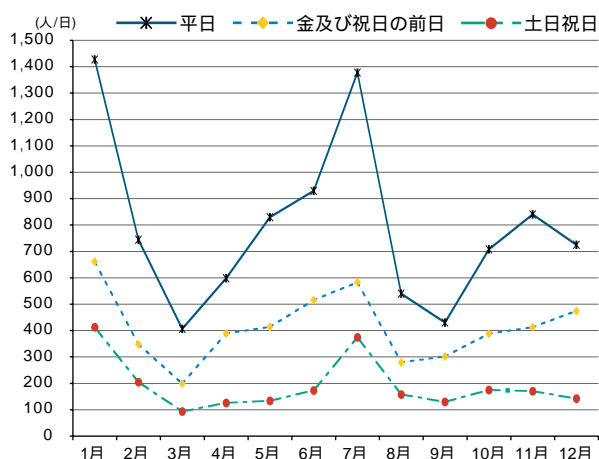
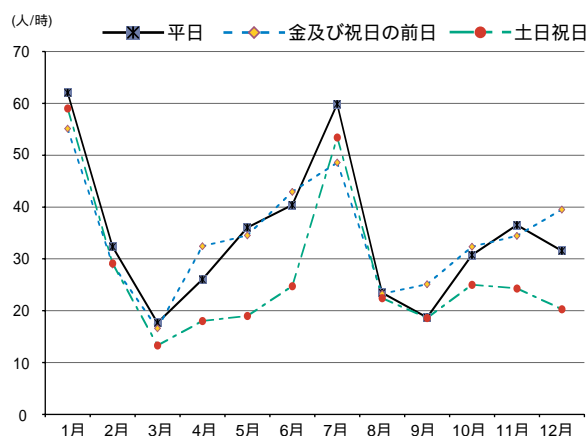


図4:「学習室24」における時間当たりの曜日別平均利用者数



実質開室時間:平日…23時間 / 金及び祝日の前日…12時間 / 土日祝…7時間

平成21年度 京都大学図書館機構 第2回講演会

次世代OPACを考える - 目録情報の視点から -

平成21年11月27日(金)

図書館が所蔵する資料(図書や雑誌・新聞など)を探す際は、まずOPAC(オンライン目録検索サービス)を使われる方が多いと思いますが、GoogleやAmazonなどの豊富な機能を持つ検索システムと比べて、現在の大学図書館OPACの多くは利便性が低く、使いづらいという声を聞くことがあります。そこでOPACの信頼性はそのままに、利用者の利便性を高め、満足度を向上させる検索システムとして、「次世代OPAC」が検討されてきています。

今回の講演会は、次世代OPACについて知見を得て、OPACの可能性について考えることを目的に開催され、106名の参加がありました。システム的な話題だけにとどまらず、OPACの資料検索ツールとしての有用性を高める根本的な要素である「目録情報」の視点から、「目録情報の専門家」「情報検索の専門家」「OPAC設計者」と講師を3名招いて講演を行いました。以下に講演会の概要を掲載します。

なお本講演の様様(動画)および講演資料は、京都大学オープンコースウェアにて公開しております。

<https://ocw.kyoto-u.ac.jp/opencourse-1/07>

< 基調講演 >

次世代OPACとこれからの目録情報

帝塚山学院大学人間科学部情報メディア学科准教授 渡邊 隆弘

ここ数年、目録情報や目録規則の動向、またそれらの将来像をめぐる議論が活発である。書誌コントロールに関する米国議会図書館、国立国会図書館、国立情報学研究所それぞれによる報告書や、目録規則に関する重要な改訂案などが相次いで公表されている。

「次世代OPAC」とは、従来のOPACを越えた機能を備えたOPACということである。定義は明確とはいえないが、その名称はC.R. Hildrethが1980年代に唱えた「OPAC世代論」を背景と



している。進化した「第三世代」OPACが遠くから登場するというHildrethの見通しは実現に至らず、インターネットの登場とGoogleに代表される情報検索サービスの隆盛により、OPACは次第に時代遅れのものとして認識されるに至った。次世代OPACとは、この反省の上に立った試みの総称である。その主な機能として、(1)簡単な検索画面、(2)キーワード入力補助機能、(3)関連キーワードの視覚化、(4)検索語との関連度(レlevance)の表示、(5)内容など書誌情報の拡張・補強、(6)ファセット型ブラウジング、(7)検索結果のFRBR化表示、(8)「タグ」など利用者からの情報入力、(9)レコメンデーション機能、(10)他のDBとの統合検索、などを挙げることができる。北米では、ノースカロライナ州立大学を嚆矢(2006年1月導入)に急速に広がりを見せている。

次世代OPACでは検索システムに注目が集まりがちである。だが次世代OPACを生かすためには、実は目録情報そのものが重要である。上記のうち既存の書誌情報を利用して実現している機能として、(6)ファセット型ブラウジングと(7)検索結果

のFRBR化表示を挙げることができる。ともに、目録の集中機能とそれを実現するための典拠コントロールに深く関わっている。典拠コントロールや目録の集中機能が十分に整備されているとはいえない日本の目録情報は、次世代OPAC導入にあたり大きなネックになることが予想される。

新しい目録規則の観点では、資料を構造化して捉える枠組みであるFRBR(Functional Requirements for Bibliographic Records = 書誌レコードの機能要件)と、そのFRBRに密着した構成をもつ目録規則であるRDA(Resource Description and Access)の登場により、典拠コントロールや目録の集中機能の重視、機械可読性の向上といった、これまでとは大きく異なる新しい目録の世界が現出した。

これからの目録に求められるものは、他のシステムと競争できる「付加価値性」であり、同時に他のシステムと連携できる「開放性」である。これらは目録情報、目録規則、そして目録業務のあり方とも併せて考えていくことが肝要である。

(わたなべ たかひろ)

< 第1講演 >

知識体系の新たな融合：情報探索と件名標目表の活用をめぐる

東京大学情報基盤センター学術情報研究部門助教 清田 陽司

分類という行為には本質的に多様な側面が内在し、単一の分類体系で世界を区切ることにはできない。どのような観点から分類するか、あるいは新しい概念をどのように取り込むかという問題が常に付きまとう。

ウェブの検索エンジンは思いついたキーワードで手軽に情報を入手できる便利なツールであり、特に事実を問う検索に対して有効である。しかし現実には利用者は単なる事実以上の情報を求めているのにも関わらず目的のテーマや探し方が分からないという問題を抱えて

いる。ここで求められるのはより具体的な「テーマの推薦」である。システム側に求められるテーマ推薦の要件には、「カバレッジ」、「組織化」、「信頼性」の3つが考えられる。図書館情報資源は専門家により構築された分類体系に基づく情報の「組織化」、査読制度や長期間にわたる情報の蓄積など「信頼性」を検討する手がかりは多く備えているが、「カバレッジ」(どんなキーワードに対しても何らかの回答を返す間口の広さ)を欠いている。これに対してウェブ検索のカバレッジは広く、情報探索の手がかりと

しては優れた性質を備えているが、組織化・信頼性の面では限界がある。一方、Wikipediaには信頼性の課題は指摘されているものの、明確な方針に基づく独自の組織化、一定のレベルの信頼性担保の仕組みを備えているという点でユニークな性質を備えている。

ルールではなくガイドラインを運用するという柔軟性、複数のコミュニティによるボトムアップ型の組織化、フォークソノミーにより新たなコミュニティを形成する力というWikipediaの知見を取り込むことは、図書館分類体系の価値を高める可能性がある。現時点では間口の狭い図書館情報資源は、利用者がたどり着きやすいパスを用意し存在をアピールすること、他の情報資源と連携することでより豊かな情報源となり得る。

この点に注目して開発された「国立国会図書館リサーチ・ナビ」(<http://rnavi.ndl.go.jp/rnavi/>)の検索システムは、ウェブと図書館を繋ぐ、調べ物のヒント探しのツールである。従来の図書館分類体系をWikipediaにより拡張し、他の情報資源への架け橋とするというコンセプトに基づいている。Wikipediaの記事を検索

のゴールではなく、出発点として位置づけ、図書館の分類体系へ、更には他の情報資源への導入の役割を果たす。逆に、ブラウジングによる



探索の拡散を防ぐために図書館分類体系を活用している。

図書館の知識、あるいは分類の価値はウェブ検索エンジンに大きく影響を受けているが、信頼性担保の手段としては今後も図書館分類体系の役割は大きい。図書館が蓄積してきた情報の最大の価値 多様性を生かすためには、利用者へのプレゼンテーション、信頼のおける検索結果の提示、さらには探索のプロセスを楽しんでもらう工夫が欠かせない。それは個人の知識欲と図書館の体系をいかに繋ぐかということでもある。

(きよた ようじ)

< 第2 講演 >

次世代OPAC実装への取り組み Project Next-L Enjuを素材として

慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所非常勤講師 / Project Next-L
田辺 浩介

Enjuとは、図書館員有志で新しい図書館システムを開発するプロジェクトであるProject Next-Lにより開発された統合図書館システムである。ファセット検索やソーシャルタギングといった「次世代OPAC」的機能だけでなく、貸出や受入といった図書館業務機能一式を含んでいる。図書館システムを持たない小規模

図書館の情報化を進めることを目的とし、積極的に図書館の新しい技術を取り入れ構築していくフリーソフトウェアとして、2008年より公開されている。

Enjuの大きな特徴としては、IFLAのFRBRモデルを可能な限り厳密に採用している点が挙げられる。FRBRモデルを使用する

ことにより、書誌同士を関連づけて資料の広がりや表現することが可能となり、コンピュータ上で使いやすい構造となっている。しかし、FRBR化された目録を作成するには Work/Expression/Manifestation/Item と4段階もの階層を踏む必要があるため、データの量や入力の手間が増加し、人手の乏しい図書館で個別書誌入力作業を行うことは非現実的である。

この問題を解決するため、Project Next-L ではEnjuを用いたProject Next-L総合目録の構築を構想している。システムを書誌管理システムと所蔵管理システムに分け、専門的知識を持った全国の書誌作成者が書誌管理システムでWork/Expression/Manifestationの関連を管理する。各図書館では所蔵管理システムでManifestation/Itemの関連のみを管理し、受入作業を行う。このように役割を分けることによって目録作業を自動化・集中化し、ネットワークの力が必要な小規模図書館でも参加できる総合目録を構築することをProject Next-Lでは理想としている。

図書館システムを考えることは、図書館で扱うデータのモデルを考えること、すなわち

図書館の目録そのものを考えることである。現在、専門家が作成した成果物はインターネットを介して瞬時に入手することが可能であり、図書館関係者に限らず世界中の人々で新しい目録モデルを考えることができる。Project Next-L Enjuは、図書館の未来は大規模組織だけで決めるものではなく、誰もがその決定に参加することが可能だということを証明するプロジェクトとして開発されている。



Project Next-L : <http://www.next-l.jp/>
Project Next-L Enju デモサイト :
<http://enju.slis.keio.ac.jp/>

(たなべ こうすけ)

附属図書館研究開発室ウェブサイト開設のお知らせ



このたび、附属図書館研究開発室のウェブサイトを開設致しました。アドレスは

<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/rdl/index.html> です。

このサイトでは、研究開発室の活動の概要や、当室の専任教員である古賀崇准教授の研究活動などを掲載しております。『静脩』前号 (Vol. 46, No. 2) で紹介した「IFLA (国際図書館連盟) 2009年ミラノ大会」についても、より詳細な内容を「まとめメモ」として掲載しています。英語ページも用意しています。

まだまだ質・量とも不十分な段階ではありますが、これから充実を図っていく所存です。

<平成21年度 京都大学図書館機構公開企画展 記念講演会 >

ジョサイア・コンドルと日本文化

工学研究科教授 高橋 康夫

本日の講演では、お雇い外国人建築家として日本へやってきたジョサイア・コンドル(1852年、ロンドン生まれ)が、日本の文化を愛し、学び、研究する傍ら設計活動を行ってきた過程を、私の見方で眺めてみます。自ずと、彼が「日本近代建築の父」と呼ばれる理由がわかっていただけるかと思えます。

【明治という時代と建築】

コンドルが来日した明治という時代は、日本が近代化＝西洋化を目指した時代です。建築に絞りますと、国家の「顔」としての正統な西洋式の建築を日本人自ら建てる必要がありました。当時の日本人にそれをできる人はいませんでしたので、建築の実務と設計教育を行う正規の建築家として明治政府のターゲットになったのが、若きコンドルでした。

彼は1876年、24歳のとき、若手の登竜門であるソーン賞を受賞します。これは、彼が日本に来なくともイギリスで十分に活躍できたことを意味しています。



【お雇い外国人建築家 コンドル先生】

彼は、翌1877年(明治10)に来日し、工部

大学校造家学科の教師を務めます。その後、帝国大学の教師になり、教育者としての活動を展開していきます。その講義を筆録し、弟子たちが日本語で出版したものが『造家必携』という教科書です。コンドルの弟子には、辰野金吾、片山東熊、曾禰達蔵、佐立七次郎がいました。片山東熊は、近代建築として初めて国宝に指定された迎賓館や京都国立博物館の設計者です。

建築家としての活動を眺めると、営繕局の顧問として国家を代表する建築を造るという役割を担って、上野博物館や有名な鹿鳴館を造ります。

コンドルの初期の作品に開拓使物産売捌所があります。これは、得意のヴィクトリアン・ゴシックではなく、日本へ来る途中立ち寄ったイタリアのヴェネツィアン・ゴシック様式を取り入れた作品です。上野博物館は、全体としてインド・イスラム風様式ですが、赤と白の柱にはヴェネツィアン・ゴシックの特徴が出ています。

正統的な西洋様式ではない建築を設計したことが、コンドルと明治政府との溝が深まる要因となりました。明治政府はコンドルに西洋の本格的な様式の建築を期待しますが、コンドルは単に西洋建築を移植するのではなく、日本にふさわしい様式は何かを考え、上野博物館のような解決案を示したりします。それには、コンドルの誠実な人となりが見られるわけですが、明治政府の要請とは少し異なりました。

東京大学の建物配置案を作成した1884年(明治17)には、名誉ある王立建築家協会の正会員に認められ、コンドルにとって一つの節目の年となりました。

【民間建築家 コンドル】

1888年(明治21)に東京帝国大学講師を辞任し、建築事務所を開きます。その二年後には官を辞して、建築事務所を持つフリーの建築家として活躍を始めます。主たるクライアントは、三菱、三井などのブルジョアジーであり、そのような階層のためのスタイルを模索していくのが、彼の後半生となります。

初期のものから眺めると、まず東京復活大聖堂(ニコライ堂)を設計、施工しました。全体としてロシアのギリシャ正教会風の意匠になっています。その後、三菱一号館を設計します(最近復元されました)。これを核に周辺に赤煉瓦の建物が広がっていき「一丁倫敦」と呼ばれるようになります。

住宅では、三菱関係が多くあります。現在公開されている岩崎邸はジャコビアン様式で設計されていて、ディテールは非常に丹念な、またプロポーションのよい建築だと思います。裏側には広大な芝生に面してベランダがあり、東にはガラスで囲まれたサンルームや喫茶室が造られています。これらは、コンドルの邸宅デザインに共通する要素だと思います。コンドルは、外観の設計が巧みであると同時に、インテリアも上品に造っています。

現存する作品のうち三つが重要文化財に指定されています。

現存する作品

:重要文化財

ニコライ堂(1891年)
 (三菱一号館)(1894年)復元
 岩崎久弥茅町本邸(1896年)
 岩崎弥之助高輪邸(1908年、三菱開東閣)
 岩永省一邸(1912年)
 三井家倶楽部(1913年)
 諸戸清六邸(1913年、桑名市六華苑)
 島津家袖ヶ崎邸(1915年、清泉女子大学本館)
 古河虎之助邸(1917年、古河庭園大谷美術館)

【日本文化の愛好者・研究者 コンデルさん】

Josiah Conder はイギリスでは「コンダー」と呼ぶのですが、日本では、大学の建築関係では「コンドル」、絵画の河鍋暁斎に縁があるところでは「コンデルさん」と呼ばれていたようです。

コンドルは日本画を好み、来日数年後に河鍋暁斎に弟子入りしますが、二年後には暁斎から一字もらって「暁英」という号を名乗るほどに上達していました。彼は、日本画を初め、服飾、庭園、生け花、伝統建築といろいろなものに関心を示しています。絵画の研究成果をまとめた『河鍋暁斎』(“Paintings and studies by Kawanabé Kyōsai”)は、ヨーロッパで河鍋暁斎の名声を高めたものですが、これが逆輸入され、日本においても明治の代表的な日本画家、浮世絵師として高く評価されることになったと言われています。

このような絵の修練と建築家としてスケッチを描くということを重ね、日本建築の研究成果を美しい絵に残しています。例えば、日光東照宮の拝殿内部、知恩院山門の上層部など、国宝・世界文化遺産クラスのものを見ても、自分の手で絵に残しています。おそらくこれが彼の建築的素養に大きく影響したものとされます。

【コンドルと日本の自然】

本のタイトルに『日本の花と生け花』(“The flowers of Japan and the art of floral arrangement”)とありますように、コンドルは生け花をアートとしてとらえています。庭園も同じようにアートとしてとらえています。ちなみに、イギリスにはコンドルの『日本庭園入門』(“Landscape gardening in Japan”)に依拠して造られた庭が十数箇所あるそうです。

コンドルは日本から西洋へ情報発信をし、日本の姿を見事に伝える一方で、自分の中に日本を取り込んでいったのではないかと思います。例えば、床の間に大きな花が飾られて

いる絵があります。非常に正統的な座敷を描いていますが、床脇の花頭窓からみえる庭の景色を描いているので、コンドルが日本の建築と庭の関係に気が付いていたと思います。西本願寺飛雲閣の絵も庭と一体化した姿で描いていて、彼がどのように日本の建築と庭をみたかが表れています。

【技術者コンドルと日本の自然】

技術者でもあるコンドルが、日本に来て感じたことは地震と地盤の軟弱さだったようです。軟弱地盤に対しては、初期の開拓使物産売捌所において、すでに「浮き地形」というものを工夫しています。現在の免震構造に近いようなものと言えるかもしれません。鹿鳴館と三菱一号館では摩擦杭を打ちこむことによって、地盤を固め、安定した基礎を造るという試みをしています。1891年(明治24)に濃尾地震が起きた時には、早速、被害を調査し、論文を発表しています。技術的な研究を進めた結果が、晩年の作品ですが、早い時期に鉄筋コンクリート造を用いた成瀬邸に現れています。

【環境の芸術】

コンドルの建築と自然の関係を見てみると、一つはアートというとらえ方をしている、「生活芸術」という言い方をしているかと思えます。そして、自然と建築と庭を別々に考えていないように見えます。西洋では、自然と都市、自然と建築は対立するものと見るのがふつうですが、彼の中では調和、融和するものになっている。全体として一つの「環境芸術」としてとらえなおされています。世界遺産条約において、自然と都市、自然と建築が相互補完的な関係にあると認識されたのは、ほんの十数年前のことですので、コンドルは先見の明がある人、日本の建築、自然、文化をよく理解した人であると言えるでしょう。

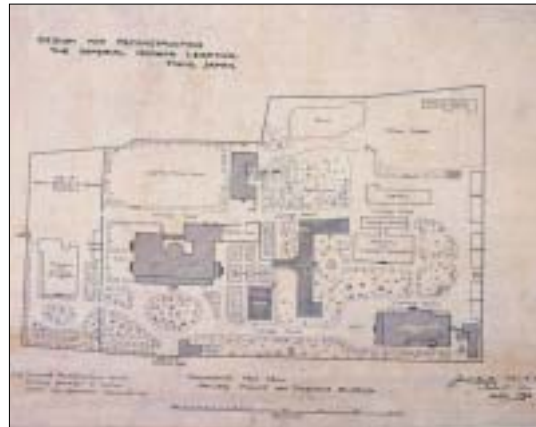
【コンドルの邸宅と庭園】

初期の岩崎邸と晩年の諸戸邸や古河邸ではずいぶん違うところがあります。当時の上流階級の住宅は、洋風建築と洋風の庭、和風建築と和風の庭、それぞれが並存するものであり、まだ和洋折衷ではありませんでした。

洋館と洋風庭園：独逸大使館、岩崎邸

洋館と洋風庭園の事例には、独逸大使館がふさわしいと思います。歴史的様式の建物の前に洋風庭園が計画され、東側に幾何学的庭園が設計されています。

岩崎家の箱根湯本別邸では、都市ではなく田舎にあるので、幾何学的ではなく自然な庭園を造っているのが注意されます。



独逸大使館 1894年(明治27)~1897年竣工



岩崎家箱根湯本別邸 1904年(明治42)

和館と和風庭園：清風荘

コンドルの設計には和館と和風庭園の事例がありませんので、説明の便宜上、京都大学が所有する名勝庭園、清風荘を挙げます。京都大学創設にも関わりがある西園寺公望の京都別邸として使われましたが、ここではフォーマルな生活をする気がなかったので、和風の建築だけが造られています。この清風荘の建築は登録文化財になっています。清風荘の建築と庭は、八木甚兵衛という和風建築の優秀な棟梁と有名な庭師「植治」小川治兵衛の共同作品とすることができます。

和と洋の融和：諸戸清六邸

1913年(大正2) 晩年に近い61歳のときに桑名市に造った諸戸清六邸は面白い事例です。全体としては、ヴィクトリアン様式の木造二階建てで、岩崎邸や石造の古河邸とは違う特徴を持っています。円筒形の塔屋は、コンドルの本来の設計では三層でしたが、揖斐川の眺めを楽しめるように四階にしてほしいというので付け加えたものといわれています。全体としてややバランスが崩れているのはそうした変更のためですが、コンドルの柔軟さが表れているとも言えるでしょう。

庭園側のファサードは、一階にベランダ、二階にサンルームがあるというのが特徴です。こういう造り方は、先ほども言いましたが、コンドルの住宅の共通要素だと思います。コンドルの作品は、すべてにわたって、外観は穏やかに、プロポーションよくまとまっていますし、内部の部屋も岩崎邸のような贅沢なものでさえ、居心地よく造られています。

二階に上がりますと、サンルームには燦々と光が入り込んでいて、幅も広く、ゆったりとした感じを受けます。二階からの眺望は、手前の広い芝生が洋風の庭、奥のほうが日本の庭師が造った和風庭園です。

和風建築は、清風荘と同じ年代で非常に質

の高い建築を造っています。大正初年というのは、江戸時代以来の和風建築の技術や材料の使い方等が結実した時期だと思います。天井は杉ではなく桐材をつかっているためとても温かい感じがします。

和館と洋館が接合されている大変珍しい事例ですが、桑名という土地に違和感なくたずんでいる様子は建築家の腕なのだろうと思います。洋館と和館が一体化、融和した建築、これがコンドルの邸宅建築設計の一つの解答であり、名解答といえるのではないかと思います。

和と洋の融和：古河邸

1917年(大正6) 65歳のときには有名な古河邸を建てています。木造の諸戸邸と違い、石造でスコティッシュ・バロニアルをベースにしています。この建物は、外観はスコティッシュ・バロニアルですが、内部には洋室とともに和風の部屋を造り込んでいます。一階部分は洋風生活、二階に行くと和室もある、和洋折衷のスタイルになっています。

彼は早い段階からこういう試みをしており、1894年(明治27)の作品、ユニテリアン教の神学校・布教本部の建物、唯一館では、外観は和風建築あるいは神社建築の雰囲気を出していますが、中は全くの洋風建築であり、ユニテリアン教の必要とする機能を持たせています。図面を見ると、周囲に三重塔や築地塀、



唯一館 1894年(明治27)

見越しの松らしきものが描かれています。唯一館の外観にふさわしい風景として、伝統的な景観を用いているところが面白いと思います。唯一館は、中身は異国でありながら外観は日本風ということになります。

古河邸の庭を含む配置図を見ますと、上の方の洋館、そして洋館の前面と東側の洋風庭園がコンドルによる設計です。下に広がる大きな空間は、小川治兵衛、「植治」に任せられます。古河邸は、当代きっての建築家と庭師の共同作品と言えると思います。



古河邸 1917年(大正6)

コンドルの作品には敷地の高低差を活用したものが多く、洋館が建っているところが小高く、庭に向かって急傾斜になっていて離れたところに和風庭園があるという造り方をしています。

ここでも全体として和と洋が融和していると言ってよいのではないかと思います。コンドルは洋館と洋風庭園しか設計していないといえそうですが、どういう庭が南側に造られるかというのを十分承知していたはずですし、二階の窓から和風庭園を眺めることも意識して本館を設計したはずです。

コンドルの庭園と邸宅の関わりを見ていま

すと、洋館と洋風庭園、和館と和風庭園、洋館と和館のつながり、洋風庭園と和風庭園のつながりがあります。そして晩年になるほど、自分が担う洋館部分と他の人の手によるしかない和風庭園とのつながりを意識して、いわば全体を設計しているように思います。

【都市と自然、建築と庭：対立から融和へ】

コンドルは若干24歳、イギリスでは全く作品を持たない建築家として、明治政府に雇われてやってきました。おそらく、当時の西洋における日本趣味の流行、日本へのあこがれが背後にあったのだと思いますが、日本画、服飾、花・生け花、風景式庭園などを学び楽しみ、本業と少し違ったスタンスで日本の伝統建築も眺めています。それらを愛し、学び、研究する過程で、都市と自然、建築と庭を対立するものにとらえる西洋の常識を超え、融和というものに目覚めていき、それを自分の建築活動の中に生かしていったのではないのでしょうか。

コンドルは19世紀のイギリスで学んだ、ヴィクトリアン・ゴシックの建築家です。当時は様式主義の時代であり、さまざまな様式を習得し設計に生かす必要がありました。東京大学名誉教授の鈴木博之さんはコンドルについて「建物ごとに様式を変えて建て、それによって土地の歴史的原点を甦らせ、インターナショナルな表現に至った」と話されたそうです。

コンドルは施主それぞれの意向、あるいは設計すべき土地の特色にふさわしい建築を考えました。上野博物館にギリシャ古典様式を採用しておけば明治政府のお雇い建築家として立身出世できたはずですが、しかし、コンドルは日本にふさわしい建築は何かと模索しました。

鈴木博之さんの説明を私の理解で言い換えますと、「彼は「日本」を表現するに至った」

ということができると思います。西洋人建築家の常識にはまったくくないような様式、それだけではなく、建築が自然と調和し、融和して存在している、そういう建築を創るに至ったと言ってよいかと思います。

コンドルがこのような建築を創った20世紀初頭は、モダニズム、近代主義の考え方が現れてきている時期です。モダニズムの典型的な事例であるとも評価される日本の伝統建

築を、コンドルは自分のものとして表現するに至った、と私は考えます。

コンドルは、イギリス人建築家でありましたが、ある意味で日本の建築家であったとも言えるのではないのでしょうか。

* 掲載図面は工学研究科建築学専攻所蔵

(たかはし やすお)

平成21年度公開企画展
日本文化に見た夢 お雇い外国人建築家コンドル先生
重要文化財「ジョサイア・コンドル建築図面」

開催期間：平成21年12月2日(水)～24日(木)(開館日数17日間)

会場：京都大学総合博物館 第2企画展示室

主催：京都大学図書館機構 共催：京都大学工学研究科・京都大学総合博物館

入館者数：2,188人

記念講演会：『ジョサイア・コンドルと日本文化』

日時：12月11日(金) 14:00～15:00

場所：京都大学総合博物館 ミューズラボ

講師：高橋康夫氏(京都大学工学研究科教授)

入場者数：70人

展示内容の詳細は企画展図録をご覧ください。

京都大学学術情報リポトリ紅(KURENAI) <http://hdl.handle.net/2433/91248>



<一冊の本シリーズ 15 >

朝永振一郎「光子の裁判 - ある日の夢 - 」

基礎物理学研究所教授 九後 太一

私は、少年時代は全く読書する習慣がなかった。実家は酒屋(小売業)で余り文化的な環境ではなかった。両親とも義務教育くらいの学歴しかなかったが、それでも父は新聞などをしっかり読んでいて案外読書好きだったようである。私が小学校の高学年の頃だったと思うが、ある日、父が余りに読書をしない息子を見かねて、福沢諭吉の「学問のすすめ」という本を買って来てくれた。日頃全く教育熱心でもない父が、突然本を買って来てくれたのには驚き、少しうれしかったが、その本は少年向け版で文字も大きめだったとは言え、全ページ文字ばかりの本で、それまで全く読書の習慣のなかった少年にとっては荷が重すぎた。最初の数ページをながめただけで、全く興味がわからず、結局読まなかった。

せっかく買って来た本をいっこうに読まない息子を見た父は、落胆したかも知れないが別にそのことを叱ったりはしなかった。が、しばらくして、当時刊行の始まったばかりの少年向け漫画週刊誌「少年マガジン」を買ってくれるようになった。これはおもしろく、毎週、次号の発行を心待ちにしていた。漫画週刊誌と言っても、その当時は一応漫画以外の「文字」の記事も一部含まれ、そういう所でも読んでいれば少しは読書の習慣がつく、あるいはそのきっかけになると思って、父は買って来てくれたのだらうかと思う。しかし、これが父の意図だったとすると、未だに「絵入り」漫画を読むのは好きだが、文字だけの(特に文系の)厚い本を読むのが苦手な私は、その意図を裏切ってしまったことになる。

私の入った高等学校は、いわゆる進学校であった。しかし、学校には意欲的な先生方が多く、単なる受験教育ではない、勉強(学問)のおもしろ

ろさを伝えようとする独自の教育法を実践されていた。国語の先生もそうであった。高校一年の最初の授業で、授業の方針について説明され、これから定期的に(2ヶ月毎に一回?)課題の小説を指定するので、それを読んで読書感想文を書いてください、と言われた。これには相当ショックを受けた。上述のようにそれまで全く読書習慣がないのに、その上、これも全く苦手な作文をしろ、というのである。

果たして、最初の課題図書は、長塚節の「土」という小説であった。失礼ながら、多分、多くの読者をご存じないと思うが、この小説は本当に「読むのがつらい」本であった。今となっては、ほとんど内容を覚えていないが、それこそ字がぎっしり詰まった文庫本のあのページで、重苦しいテーマの話が連綿と続いた、という記憶だけがある。あれは全くの「苦行」であった。初めての読書感想文もかろうじて書いた。このような「難しい本」を初めに読んだのは、良かったのか、悪かったのか。そのおかげか、その後の課題図書は割合すらすら読めるようになった。とにかく、何を読んでも、あの長塚節の「土」の苦行ほど大変なことはない、という気がした。しかし、これは字ばかりの本に対する耐性を得させはしたが、決して読書好きにはさせなかった。

高校一年生の授業でおもしろかったのは数学と物理だった。数学は中学校時代から得意な科目だった。地域の公立中学校からその進学校の高校に編入で入って、余りに進んでいるため、最初全くわからなかったが、「自分は数学が得意だ」という意識が頭からあって、少し勉強すれば必ずできる、という全く裏付けのない自信があった。そして実際、しばらく勉強すればすら

すらわかって一段と好きな科目になった。一方、物理は、自分には全く「新しい科目」であった。その初めの頃の授業で、「ある一定の加速度 a で走ったとき、 t 秒後の速度と位置を答えよ」という問題があった。私にはちんぷんかんぷんであったが、同級生の一人が前に出て、なにやら速度の時間変化のグラフを書いて、その下の三角形の面積が走った距離である、などと説明した。その説明はその時の私には一向に理解できなかったが、その後、放物線運動が水平方向の等速運動と鉛直方向の等加速度運動に分解出来ることなどを習うにつけ、十分わからないまでも大変興味がわいた。それに、その物理の担当の先生が実は京都大学のオーバードクターをしている非常勤講師の方で、非常に熱心に教えていただいた。必ずしも教え方がうまいわけではなかったが、そのおもしろさを伝えようとする熱意と真摯さに感銘を受けた。その後、現代物理学が、時間の流れ方や物の空間的長さが観測者により異なるとか、非常に深遠な理論であるらしいことをその先生から教わった。

そうこうする中、私が高校2年生の時、朝永振一郎博士がノーベル物理学賞を受賞するというニュースがあった。これは、私にはかなり衝撃だった。湯川秀樹博士と同じ素粒子論の分野で、湯川博士と同級生だった朝永博士が、日本人として二人目の受賞者になられた！ノーベル賞の発表からしばらくして、朝永博士の「量子力学的世界像」というタイトルの単行本が現れた。高校の近くの書店の店頭にも平積みされたその白い美しい装丁の本は、買わずに一部を店頭で立ち読みをした。そのときに読んだのが「光子の裁判」という題の文章である。

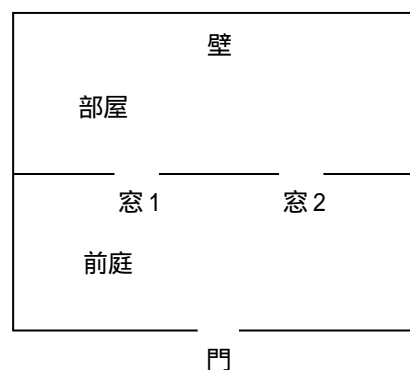
題名の示すとおり裁判の話で、被告は「波野光子(なみのみつこ)」、弁護士は「ディラック弁護士」、検事には名前はなかったと思う。事件が起こったのは図に示したような奇妙な「屋敷」の部屋の中である。門を入ると庭があり、その奥に屋敷の幅一杯に広がった部屋が一つだけあって、その部屋には窓が正面(門側)の壁に二つあるだけで、ドアもない本当に奇妙なものである。裁判では被告

波野光子が事件の現場の部屋へどのように入ったのが争点となっていた。波野光子は、

正面の門を通り、庭を横切ってその部屋の二つある窓から「二つを同時に通って」入ったと主張する。が、検事は「窓1を通ったなら、その時は窓2は通っていないはずであり、窓2を通ったのなら窓1は通っていないはずである。窓1と窓2を『同時に』通ったなどという奇想天外な主張は誰も認めないだろう」と言うのである。そこでディラック弁護士がその奇想天外な主張が実は正しいものである、ということを順々に説得してゆくのである。そのすばらしい論証が全て終わったとき、著者は眠りから覚め、それが昼のうたた寝の夢であったことを悟る、という文章で終わっている。

ここで紹介したあらすじは全て私の記憶からの再生で、細かいところは違っているかもしれない。もちろん高校時代だけでなく、大学時代にももう一・二度読んだことがあるのである程度憶えているわけである。「波野光子」というのは、光の粒子である「光子(こうし)」が実は波でもある、ということから著者の朝永博士がしゃれて付けた名前である。ディラック弁護士は、朝永博士がその著「量子力学」を訳した、高名なイギリスの物理学者ディラックである。量子力学では、光子に限らず、電子も陽子も、その他全ての存在が、「粒子であると同時に波である」ことを教える。世界を構成しているミクロな物質粒子は、こういう不思議なものであること、この物質世界の成り立ちについて自分が何もわかっていないこと、を私はこの本から学んだ。将来素粒子論を自分も是非研究したいと思う大きな契機となった。

(くご たいち)



guide to laj



～ 文学研究科学術雑誌閲覧室紹介 ～

2009年10月1日、京都大学大学院文学研究科は、文学研究科図書館の所蔵するすべての雑誌を移転収容し、「学術雑誌閲覧室 The Library of Academic Journals [略称 laj (エル エー ジェー)]」を開館しました。本稿では、lajの特長や雰囲気をご紹介します。

特長

lajの最大の特長は、京都大学に所属するすべての方が書庫内を検索し、資料を手にとることができることです。利用者の約4割は他学部の方であり、文学部の方に限らず幅広く利用されています。

これまで、雑誌の利用にあたっては「閲覧証」への書名や請求記号の記入が必要だったため、皆様に煩わしい思いをさせてきましたが、目録情報とシステムの整備により、身分証とバーコードラベルの読み込みによる機械的な貸出手続を実現しました。また、書架の大部分を集密書架でなく固定書架にしたことで、他の方の利用を気にすることなく、目につくままに雑誌を手にとることができるようになりました。これらの改善により、lajでは、皆様により快適に雑誌をご利用いただけます。

さらに、すべての閲覧席では無線LANが利用可能です。

資料内容

資料は19世紀の貴重なものから最新のものまで、人文・社会科学系の学術雑誌8,800タイトル、約10万冊が揃っています。雑誌の総冊数は当館の蔵書量(約100万冊)の10分の1にあたりますが、1日あたりの利用冊数では雑誌が5分の1を占めます。特に歴史学系や国文

学系の雑誌が多く利用されています。

設置場所

lajの設置場所は文学部東館北棟で、図書館のある文学部新館の東隣に位置する、煉瓦造りの建物です。文学研究科図書館の前身である文学部閲覧室は、哲学科・史学科・文学科の3室に分かれていました。lajは、かつての史学科閲覧室があった場所に、講義室や倉庫のスペースをも併合し、大規模な改修・改装を経て誕生しました。入口である閲覧室は3階、書庫は1～3階にあります。



雰囲気

閲覧室は、ゆったりと資料を広げられる大テーブルと、カウンター仕様の個人席全14席を備えています。心地よい場所にするため、「イス」にも吟味を加えました(ぜひ、座って確かめてみてください)。個人席の窓はとても見晴らしがよく、樹々の梢の向こうには、大正期に建てられた赤煉瓦造りの工学部土木工学教室本館が見えます。広々と明るい閲覧室と書庫にかつての面影はありませんが、昔から変わらない穏やかな景観は、喧騒を忘れさせてくれます。

最後に「laj」のマークは、「l」と「j」を椅子、「a」を机に見立て、人が集い知見を深める空間を表現したものです。司書一同、新しい環境が教育研究の更なる進展の場となることを願っています。図書館よりも気取らない場所で、雑誌を手にとってみませんか？

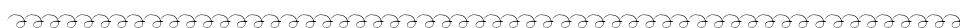
京都大学大学院文学研究科学術雑誌閲覧室
The Library of Academic Journals(laj)

Mon. - Fri. 9:00 - 18:00

HP:<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/lib/laj/>



(文学研究科図書館)



教員著作寄贈図書一覧

(平成21年6月～平成22年1月)

身分・所属	寄贈者氏名	書名	出版社	出版年
人間・環境学研究科	富田 恭彦	科学哲学者柏木達彦の多忙な夏 (角川ソフィア文庫 SP G-105-1)	角川学芸出版	2009
文学研究科	西村 雅樹	世紀末ウィーン文化探究	晃洋書房	2009
教育学研究科	川崎 良孝	中国の図書館と図書館学：歴史と現在	京都大学図書館情報学研究会	2009
文学研究科	川添 信介	トマス・アクィナスの心身問題：『対異教徒大全』第2巻より	知泉書館	2009
農学研究科	末原 達郎	文化としての農業 文明としての食料	人文書館	2009
人間・環境学研究科	稲垣 直樹	エルナニ (岩波文庫 赤532-6)	岩波書店	2009
文学研究科	松村 朋彦	越境と内省：近代ドイツ文学の異文化像	鳥影社・ロゴス企画	2009
工学研究科	竹脇 出	Building Control with Passive Dampers	J. Wiley & Sons (Asia)	2009
名誉教授	鈴木 仁美	窒素酸化物の事典	丸善	2008
人文科学研究所	籠谷 直人	帝国とアジア・ネットワーク	世界思想社	2009
名誉教授	泉 孝英	外地の医学校	メディカルレビュー社	2009
名誉教授	西田 龍雄	西夏文『妙法蓮華経』訳注(上)	東洋哲学研究所	2009
名誉教授	吉川 榮和	新リスク学ハンドブック	三松株式会社出版事業部	2009

この一覧は寄贈者著作のみの掲載となっております。上記以外にも多くの図書を附属図書館や部局図書室にいただきました。今後とも蔵書充実のためご寄贈いただきたくよろしくお願いいたします。

図書館の動き

平成21年	17日	図書館協議会幹事会(平成21年度第4回)
11月 5日	18日	図書館協議会(平成21年度第4回)
10日	22日	図書系連絡会議
17日		国公立大学図書館協力委員会(NII)
20日	平成22年	
26日	1月21日	図書系連絡会議
27日	23日	図書系職員海外調査研修(～30日 英国・オランダ)
30日	2月 5日	「次世代図書館システム構築設計書策定支援業務」中間報告会
12月 2日	9日	図書館協議会第一特別委員会(平成21年度第4回)
3日	17日	図書館協議会幹事会
8日	18日	図書館協議会(平成21年度第5回)
9日	19日	図書館機構第3回講演会
9日	23日	実務研修(レファレンス)
11日	25日	図書系連絡会議
17日		

目次

<特集：図書館への期待4> 京都大学図書館機構将来構想の策定にあたって	岡田 知弘	1
附属図書館「学習室24」開室から1年経ちました		4
<平成21年度 京都大学図書館機構 第2回講演会>		
次世代OPACを考える - 目録情報の視点から -	渡邊 隆弘・清田 陽司・田辺 浩介	6
附属図書館研究開発室ウェブサイト開設のお知らせ		9
<平成21年度 京都大学図書館機構公開企画展 記念講演会>		
ジョサイア・コンドルと日本文化	高橋 康夫	10
朝永振一郎「光子の裁判 - ある日の夢 - 」<一冊の本シリーズ15>	九後 太一	16
guide to laj ~文学研究科学術雑誌閲覧室紹介~		18
教員著作寄贈図書一覧		19
図書館の動き		20

編集後記

今年度は「図書館への期待」について特集しました。今回の特集は今号でひとまず終了します。特集は終了しますが利用者の期待に応えるための図書館員の努力はこれからも続きます。(w)